

染の百趣矢野

染色の伝統と文化を守るための たゆまぬ努力が生み出す、瀟洒な東京友禅の逸品

東京友禅の真髄をうかがわせる
精緻で美しい柄ゆき

染めの鮮やかさ、描き絵の精緻さが群を抜いている。本格的友禅の名店「染の百趣矢野」は歴史を誇る店がひしめく京都にあって比較的若い店ですが、上品な作風には定評があります。端正で流麗な表現を得意とする、この店の生み出す礼装・盛装のきものは、本友禅の逸品として業界でも一目置かれるものばかりです。「染の百趣矢野」が本文とする糸目糊を置いた本友禅は、円錐形の筒に糊を入れ、模様輪郭の上に米から作ったもち糊を置き、染料が染み込まないよう防染します。糸目糊の線をき

れいに出すには糸目糊を研究し、何度も「地入れ」という作業を繰り返す。染料の染み込みで線が浸食されないように、細心の注意を払って作業が行われますが、熟練した職人が手間ひまかけて仕上げていく本友禅にこだわるのは、仕上がりの美しさや模様の印象に格段の差が出るからなのです。

かたくななまでに
伝統手法を守るきもの作り

現代では科学的に研究が進んで、染料や糊の発達にはめざましいものがあります。近代的、かつ合理的な手法で製作されたきものは、一見すると本友禅のように見えるものもありますが、染め上がったときの深

い趣や表現の優しさ、柔らかさに差が出ます。効率や採算が優先される現代において、伝統的な技法を守りながら丁寧にきもの作りをするのは生やさしいことではありません。しかし、そのでき上がりの違いに歴然とした差が出るからこそ、「染の百趣矢野」はこのやり方を踏襲しているのです。ただし、技法は伝統的でも生み出されるきもの意匠は、現代女性の感性に触れる、素晴らしいものばかり。はんなりとしたおやかな雰囲気のものだけでなく、洗練された都会的なデザインのきものも手掛け、「古の心を現代に生かす」べく、柔軟な創造性を旨として、21世紀の新しい伝統美をもつきもの作りに励んでいます。



婚礼やパーティで引き立つ
訪問着と黒留袖

右の訪問着はシボの大きい古代ちりめん地に貝桶、菊や橘を染めたもので、格調の高さが群を抜いています。左の黒留袖はひと味違った南蛮船の柄で、糸目友禅と刺繍で立体的に表現された模様が印象的



糊糸目の高度な技が生み出した、豪華な振袖

濃い紫のりんず地に咲き誇る百花と繪扇を染めた振袖。糊糸目で柄がぼつちりと鮮やかに表現されています。第一級の礼装として、また花嫁衣装としても他を圧倒するほどの美しさです。

東京友禅を謳う店がなぜ京都に、と思うかもしれませんが、きもの流通の中心である京都では、東京で製作された友禅を扱う店はそう珍しくはないのです。その中でも東京の超一流工房で作られたものだけを扱うのがこの店です。吟味して選ばれた矢野ブランドの東京友禅は、繊細な糸目の美しさが特徴で、筆の上手さも目を引きます。

矢野が得意とするデザインは、意匠化した文様や風景文様、小袖写し、そして正倉院などの舶載裂写し、といずれも古典の美を堪能できるものですが、それだけに作り手の技量が表れやすく、こうした「きもの」を得手とする店の自信がうかがえます。

江戸期をはじめとする貴重な雛形本も数多く所蔵しており、古典のデザインと伝統的な技法を研究するために、商品以外にも小袖写しのきものをよく製作する矢野には、次のようなエピソードがあります。

今ではほとんど行われなくなった楊枝桐友禅の小袖を復刻した折、なかなかのできればえだったので研究者に見てもらったことに。返ってきたのは「糸がだめ」という答えでした。現在、きもの業界では九〇パーセント以上の白生地が外国産の糸を使用しているとか。矢野では、外国産の糸が太く脂分が多いため、昔の繊細な染めを再現するのは難しいという結論に達しました。それ以来、白生地はほとんどすべて「あけぼの」をはじめとする国産の糸を用いているそうです。古典を愛し、伝統の技を継承し、良きものを作ろうとする店の姿勢が素材へのこだわりを生み出したのです。



矢野が小袖写しとともに得意とする風景模様と舶載裂写しのシリーズ。右は色留袖、左は黒留袖の裾模様。精緻な表現が美しい礼装

卓越した意匠で東京友禅の真髄を生み出す京都の名店 染の百趣 矢野



入手困難な雛形本を数多く持つ矢野では、意匠的に小袖を写し、それを現代のきものへと昇華させています。



昔の雛形本より取材した小袖写しの振袖。入り子菱地紋の濃い地に御簾や、意匠化された桜や橘などが、大胆で伸びやかに表現された一枚。古典調のなかにも洗練された雰囲気

染の百趣 矢野

☎075-432-3721

京都市上京区中立売通島丸西入東町475-1